アルプス

高山に配された湖水美

歐羅巴のアルプスへは前後三度登つた。アメリカのロッキー同樣此處も交通の便は相當によい。瑞西を中心に、伊太利、佛蘭西、獨逸の諸國に挾まれてゐて、宛然歐羅巴の大公園の觀あるものが、つまりアルプスの連峰である。

高さは最高一萬四千尺ぐらゐだから、富士山などゝ較べてみても、さほど驚くべきものではない。山中を過ぎつて鐵道は諸方に通じてゐる。シンプロン・トンネルとかセント・ゴサード・トンネルとかいふ有名な大トンネルもできてゐる。

道路は殆んど自働車で通行できるやうになつてゐる。が、現今のやうに自働車の發達しない以前には、馬車で往復したものである。

私が初めて登つた時には、五頭立の馬車に乘つた。前の晩に、前の腰掛にしてくれとか、後ろの腰掛がいゝとかいつて、腰掛の席を申込んでおく。馬車はチヤランチヤランと朗らかな鈴の音をたてながら登つて行くのである。それは實に風情に富んだ、長閑かな馬車であつた。

恰度日本の日光のやうに、道はうねうねと曲り曲つてゐる。だから歩くとすれば、これも日光のやうに道を曲つて迂廻せずに、道から道へと眞直ぐに突切つて、近道をして行くことができる。

そこで時に歩きたくなつたりすると、馬車から降りて、その近道を突切つて、上の道の方へ出る。馬車は迂廻してくるのだからまだ來ない。その馬車のくるのを待つて、再び車上の人となつて、更に馬車で道を進む、といつたやうな、自働車の旅では思ひもよらないのんびりしたものだつた。

自動車の方が速力は早いし、便利は便利かも知れないが、馬車の頃の登山の方が遙かに趣あるもの

であつた。私は遠く以前のアルプスの馬車を追懐して、限りない愛着と懐しさとを覺えるものである。

山中には湖水が方々にある。いづれも相當に大きな湖水で、日本の琵琶湖よりも幾らか小さいぐらゐの程度のものが多い。水もなかなか濟んでゐて綺麗である。一體に外國の山の水ほどういふものか餘り綺麗でないが、アルプスの水だけは例外である。とはいつても、日本の黒部川の澄み切つた水などに及びもつかないことは勿論である。

山中の湖水だから湖水はいづれも山に圍まれてゐる。そして湖畔の山といふものは、たとへ雪を冠つてゐなくとも、高さがそれ程のものでなくとも、極めて優れたよい眺めとなつてゐる。それは湖水といふよき點景を持つてゐるからであらう。

湖水があれば其處は低地である。從つて湖畔には、自づから町が開けてゐるといふ順序になる。

ゼネバ湖畔には、ゼネバの町がある。この附近にはシロン城のやうな古蹟もある。

インタラクンの町の近くには、間で中斷されて二つになつてゐる湖水が並んでゐる。

ルセルンの町も湖畔に臨んで立つてゐる。ルセルン湖畔にはまたピラタス、リギといつたやうな美しい山々が聳えてゐる。高くはないが、高山美の觀點からいふと最も手頃な山である。といふのは餘り高い山だと、却つて展望美が衰へてしまふやうな場合が多いからである。リギ、ピラタス共に、登るには、舟でルセルン湖を渡つて、その麓へ達するのである。そして登山鐵道で登るのである。

ルセルンから湖水を隔てて、リギ、ピラタスの諸連峰を望む氣持は全く實感なしには想像できないほどの見事さである。世界に誇るに足る眺望美といふことができやう。

コンスタンスの町も湖水に臨んでゐる。ライン河はコンスタンス湖に發してゐるのである。その途中にラインの瀧が落ちてゐる。この瀧はアルプス山中でも最も美しい瀧の一つである。

サンモーリズの町にも湖水がある。此處は世界に聞えた畫家のセガンチニの生れた所である。畫室は小山の裾の池の邊りに立つてゐる。セガンチニといへばこの町では、神樣のやうに尊敬されてゐる。

これ等の湖水地方の風景は、その豪快さに於いてはザルマット、ユングフラウの壯觀には及ばない。

しかし湖水があるためと山々に懸つてゐる氷河とのために、如何にも平和な高山に來てゐる感じがあつて、居心地がよく心が和やかになつてくる。

大體アルプスを大別すると、湖水地方と特に山岳が秀でて高い地方と、山を縫つて通じてゐる鐵道から外づれた地方とから成つてゐる。しかし鐵道から外づれた地方といつても、そこにはちやんとした自働車通路が通じてゐるから不便なことはない。

道がよく出來てゐるから、徒歩で登らうと思へばそれも差支へない。

冬になるとよくスキーの一隊が、ユンクフラウに近いグリンデンワルドやサンモーリズに行く。そしてユンクフラウ・ヨツホからスキーに乘つて滑つておりる。見てゐると、スキーの跡に線を曳いて、遠く遠く遙かに麓の方までも滑つて行く容子が實に壯快である。

日本アルプスの名は此處から取つただけあつて、日本アルプスに似た風景は大分多い。ただ日本アルプスに湖水の美の少ないだけが歐羅巴のアルプスと違ふ。何といつてもアルプスでは此方の方が本元な

ユングフラウ

のだから、いかに日本アルプスに優つてゐやうともやむを得まい。

美峰ユングフラウ

アルプス中でも岩の露出の最も美しい、高山美に富んだ山はユングフラウである。ユングフラウとは獨逸語で、若き女の意であるが、その名稱から聯想されるやうな優しい姿ではない。

美しいことは美しいが寧ろ豪壯である。

一萬二千尺の地點まで登山電車が通じてゐる。電車は、トンネルまたトンネルといつた具合に、トンネルばかり拔けながら登つて行く。私の最初に行つた年に、後五年たてばクラインシャイデッから頂上まで電車を通すといつてゐたが、やつとヨッホまで通したばかりである。頂上まで電車を上げる意志は、今では全くないらしい。

ユングフラウ・ヨッホにホテルがある。岩を掘り拔いた場所にホテルが建つてゐるのである。同じ場所が電車の停車場をも兼ねてゐる。ホテルから直ちにエレベーターで停車場へ出られるやうになつてゐる。

だからユングフラウに登るには、お婆さんが子供を連れてでも行けるわけである。風景の優れた所なら、大低さういふやうに便利よく、總ゆる設備が整つてゐる。屈强の男でなければ行けないといふやうな場所は、行つてみたところで多くは詰らない。苦勞をして行つてみる程の値打がないのである。

ユングフラウがアルプスの他の山々に秀でてゐる大きな原因の一つとして、ユングフラウの雪と氷河の容子が極めて美しいといふことを擧げることができる。それと斷崖の岩の露出の美しいこととは、確かにユングフラウの一特徴を成してゐるといへる。

ウエデホルン・アイガーの名ある斷崖の如きは、裾から頂上まで一氣に聳り立つた雪なき一枚岩の絶壁を成してゐる。

それと反對の西側の方も大きな谷になつて、その斷崖續きにはロッテルブルンの瀧が落ち懸つてゐる。昔からよく畫の題材に扱はれてゐる瀧で、それだけ水も形も優れたものである。

風色としては、それ等の斷崖の中段邊りに立つて眺めるのが最も佳絶であるやうだ。餘り上へ登ると、斷崖の面なども見えなくなつてしまつて、變化は乏しく、風色が却つて衰へてくる。

絶頂まで登れば勿論眼下の展望美が遮るものもなく展開されるであらうが、餘りに寒氣凛烈で、そんな眺めを樂しむといつたやうなことは實行性がないといつてよろしい。さういふ點は日本の山と大いに異るやうである。

登山鐵道の通じてゐる一番高い所は、クラインシャイデンである。

眺めとしてはこの附近が最もよい。展望美も利くし、脚下にユングフラウ自身の斷崖を望み、仰げば同じくユングフラウの氷河も眺め渡される。

恰度ユングフラウを飾る氷河の裾に當るのがその地點である。

ユングフラウのみに限らず、何處の山でも其の程の眺めを私は最も好きである。餘り高く登るばかりでも風景はよくなるとは限らないのが普通である。

そこに立つて仰ぐと、氷河の美を遺憾なく味はふことができる。

眼の上に、シルヴーホルンといふ三角山の尖つてゐるのが見える。クラインシャイデンに立てば、その氷河の厚さまでも側面からはつきり觀取することができる。

氷河は透き通るやうな、綠がかつた色を放つて、悠然と懸つてゐる。

時にその斷崖を、弛んだ積雪か、水が流れ落ちると同じやうに、瀧になつて落下する。それもまた壯觀な眺めの一つである。

この邊一體氣象の變化が甚だ多いので、その折々に眺めも變化するわけだが、そのいづれといふこともなく常に無限の美を樂しむことができる。

が、わけても忘れ難いのは、氷河の斜面が赤々と昇天の太陽の光線に染め出される夜明間際の眺め時

である。一切はまだ深く眠りに落ちてゐる。山々もまだ眠り醒めないやうに思はれる。絶對の靜謐と神秘とが天地空間を占めてゐる。

その時、そつと山の眠りを呼び醒ますかのやうに、紅の朝日の光が氷河を流れ始める。と見るまにその色の濃度が加はつて、世にも鮮やかな紅色の氷河が現出するのである。

もう一つ忘れ難いのは雨上りの美觀である。今までの雲が見る見る何處へか消え去つて、眼に沁みる程もくつきりと、氷河と斷崖の線と色とが眼の前に描き出される。それは線と色との高山美の極致である。

ユングフラウから山を越えて走つてゐる鐵道に乘つて、メーリンゲンで下車すると、ユングフラウに連るエンゲルバーグに行くことが出來る。その道は徒歩でもさほど困難なことはない。

エンゲルバーグは風景としては、ユングフラウなどよりは落ちるやうである。先づ二流の風景といはねばなるまいかと思ふが、此處まで來ると、アルプスも隨分山深く分け入つた感じがしてくる。此處までは日本人も餘り來ないやうである。

山はなかなか高峻の氣を帶びてゐるが、谷間が廣くないので、遠望の美には乏しいといつてよい。

しかし瑞西では、そんな山奥の宿屋でも、客扱ひがよく、親切を極めてゐるから、實に居心地がいい。ホテルの經營の巧みなことは世界でも瑞西人に敵ふものはない、といはれてゐるが、客に對する行屆いたその親切さを見れば、成程ホテル經營の巧妙さの秘訣はここにあるのだなと頷かれる。

瑞西のアルプスでは、世に名だたる名山と、その反對にごく平凡な山との兩方に鐵道が通じてゐる。平凡な山といふのは、なかなか面白い思ひつきで、その目的とするところは、山それ自身は觀賞の價値に乏しくとも、つまりその山の高い部分から、相對する名山を眺望しやうといふのである。

登るよりは眺める方に美の多いことは先にも說いたが、瑞西人はその意味をよく會得してゐるのである。されば登つて樂しむことも可能だし、眺めるにも申分ないといつたやうに、兩途の鐵道を敷設してゐるのである。

ユングフラウを眺望する美觀を味はふに最もよいシニック・プラットの鐵道の如きがそれである。その鐵道によれば、ユングフラウ全山の美觀を我が物にすることのできるのは勿論、遙かの湖水までも手に取るやうに現はれてきて　眺望を恣にするには申分ない地點を走つてゐる鐵道である。

アルプス中でも、ユングフラウ附近の風景が最も佳絶を極めてゐるといふのは定評であるが、ユングフラウ附近から他の地方へ行つて見ると、その意味がよく分る。

ユングフラウ以上の高い山はある。またユングフラウに匹敵する氷河や谷間もあらう。しかもユングフラウに於けるほど、その美觀特徴をはつきり視覺に收めてこれを樂しみ得るといつたやうな場所は他の何處にもない。

それほどユングフラウ附近では、高山美を遺憾なくどの方面からでも味得できるやうに、充分の注意を拂つて總ての設備が施されてゐる。總ての條件が實によく備はつてゐるのである。

例へば佛蘭西領のシヤモニーのモンブランであるが、これはアルプスの最高峰であるにも關はらず、その美觀に於ては遂にユングフラウに一籌を輸するといはなければならない。

佛蘭西人が瑞西人ほどアルプスに對して意を用ゐてゐないといふことにもなるが、それだけの高峰を何處からも完全に眺めることができない。それにその高峰の裾は谷になつてはゐるものの、大きな岩石が里の近くにないために、斷崖美、岩石美を味はふといふことも容易でない。

鐵道に乘つて行つても、折角の高峰の頂上を、充分に眺めるといふわけにはいかない。さうかといつて離れて眺めるには、ユングフラウのやうにこれと相對した山に、鐵道が敷設されてもゐない。

とはいへ、モンブランを眺めるには、やつぱりこれと相對した山に登るのが最もよいやうである。しかもそれといつても、大分上まで登らねばならないので、相當に骨の折れることは覺悟の上で行かねばならない。

氷河のメルド・グラスに向つて通じてゐる鐵道も、氷河の美を味はふには最もよい位置を走つてゐるが、モンブランの大觀を望むには充分適當とはいひ難い。

その氷河にしても、中段の絶壁はなかなか面白い形を成して懸つてはゐるが、ユングフラウの氷河ほど大きくないから、多少見劣りのするのは致し方がない。

だが佛蘭西人も次第に瑞西人のやうに、アルプスの高山美を味はふことに留意せねばならないといふことに氣がつき始めて、六年程以前からモンブランの大觀を味得するための登山鐵道を、前面の山に敷設することを計畫し始めたから、それが完成した曉には、もつと容易にモンブランの壯觀に接することができるやうになるであらう。

しかし何といつてもモンブランの頂上は、のつぺりとした雪の山だから、奇拔な線を見出すといふやうなことは出來ない。さういふ點でもユングフラウの第二位に落されねばならない。

マツターホルンの險

ユングフラウを中心とする連峰の一團から、もつと伊太利寄りに、ザルマット高峰の一團がある。この地方はある意味ではユングフラウ以上とも思はれる程の特色ある高山美を發揮してゐる。

ザルマットに達するための鐵道の終點はザルマット村である。村には多數のホテルが經營されてゐる。民家には瑞西特有の丸太小屋が多い。屋根の上には、天然に割れたまゝの山の石を並べてゐる。さうした丸太小屋の家々の眺めも感興が深い。

その鐵道の終點から、更に山の中腹の雪の線上まで登山鐵道が通じてゐる。そこまで登れば大分の高さに達する。その鐵道を利用して登つて行くと、次第に附近のマツターホーンとか、ブライトホルンとか、マウント・ローザとかいつたやうな高峰が、手に取るやうに見えてくる。

マウント・ローザは瑞西最高の高山である。しかしのつぺりとした雪の山で斷崖がないために、それ程の高山のやうには思はれない。眺めとしてはなかなか美しい。

マツターホーンはアルプス中でも、これほど嶮峻な山は珍らしい。日本アルプスでいつてみれば、槍ケ

岳を一段と大きくした山とでもいへやうか。頂上は烏帽子の形に似てゐる。

その頂上に至る中途に一個所、更にむつくり突起した山がある。その山の頂きまでは麓の村からでもごく手輕に登ることが出來る。私なども畫布をさげて通つたものである。

その途中にまたホテルが立つてゐる。池などもある。池の邊りで牛や羊が草を喰つてゐるやうな長閑な風景を見ることもできる。森林帶を拔け出てから、大分長い地域にわたつて草原が續いてゐる。その草原は牧場の役割を勤めてゐるのである。

その中途の山の頂きまで達する道の容子は、日本アルプスの殺生小屋から槍の頂上へ登る程度と思へばよい。

ゴルネルグラット登山鐵道が、このマッターホーンと向き合つた反對の山を登つてゐる。これも瑞西人の意を用ゐたところで、登るよりも眺めることを主として設けた鐵道である。だからマッターホーンの全幅を窺ふには、この登山鐵道を利用するのが一番よいといふことになる。

最高峯まで登るには、容易ならぬ困難を必要とする。互ひの軀を綱で繋ぎ合つて攀ぢて行くのである。今までにも幾人か犧牲者を出したほど嶮岨を極めてゐる。雪の上を傳はつて行くのである。

登山家の辿つて登る積雪の部分と反對の側は、切り斷つたやうな岩石の絶壁である。それは登るにも何も術の施しやうのない絶壁である。

頂上は高さからいつても隨分高いので、登り盡してみても寒氣凜烈で、とても長居はできない。

マッターホーンを背景にしたザルマット村の風色には、甚だ愛すべきものがある。草原が廣々と展開してゐて、其處此處に高山植物が點々として花を開いてゐる。高山植物とはいつても日本のとは種類が違ふやうである。

高山植物の花で最も知られてゐるのは、エーデルワイズである。白色の綿狀で星の形をしてゐる。停車場へも村の娘などが束にしてこの花を賣りに出てゐる。しかしそれとても買つて貰ふためにしつこく客に附纏ふやうな醜態は見せない。

さうした點にまで瑞西人は客の好感といふことを考へてゐるらしい。だからさういふ花賣りの娘を見ても、スキートな懐しみに滿ちた旅の風情を覺える。

エーデルワイズは素人が見つけるとなると、ちよつと見つけにゝいが、そのほかにもさまざまの色の花が草原を色彩つてゐる。餘りの氣持のよさに、私は人の這入つて行つてはいけない區域まで侵入して叱られたやうなこともある。

湖水もさうだが、高原となると日本アルプスには更に少ない。だから朗らかな草原にゐて、連峰を眺め見るといつたやうな樂しみを味はふ場所が殆んどない。さういふ意味で兎に角五色ヶ原などは珍重すべき場所ではなからうかと考へる。

ローン河を辿る

アルプスの山々を縫ふて走つてゐる鐵道の沿線には實にトンネルが多い。セント・ゴザード・トンネル、ループ・トンネル、シンプロン・トンネル等を始めとして、長短無數のトンネルを汽車は拔て行く。時に汽車から古風な寺院の尖塔などが眺められる。その尖塔が、トンネルを出る度ごとに、位地が變る。トンネルに入る前には右側に見えてゐたと思つたのが、トンネルを出ると、いつのまにか左側に來てゐる。

これを以てみても、如何に鐵道が曲り曲つて通じてゐるかゞ分らうといふものである。

山の嶮岨な所は殆んどトンネルである。だから汽車に乘つてゐると、山の嶮岨なところは殆んど見えず、從つて風色優れたものも多くは見ることができない。

末はゼネバ湖に流れ込むローン河に添ふた谷間傳ひに登つて行く途中の風景は面白い。沿道の斷崖の上に、各所に昔の城廓の跡の殘つてゐるのが興味深く眺められる。

ローンの氷河の直ぐ端にホテルがある。そのホテルからは室の窓からでも寫生することができるの

で、そのホテルに滯在した。

氷河の方もなかなか特色あるもので、ホテルの直ぐ前が氷河の裾になつてゐるのであるが、そこは氷が劍を並べたやうな形に林立してゐる。そして氷に穴があいてゐて、そこから氷河の解けた水が流れ出てゐる。

少しく俗ではあるが、その穴に人工を加へて、案内者が見物客をその穴の中へ連れて入つたりできるやうになつてゐるものもある。

その邊から更に少し上方へ登ると、アンダマット村がある。その村には、岩の間に昔の砲台の跡などの殘つてゐる所がある。ローン河の沿道かけて、この邊一帶は佛伊戰爭の古戰場なのである。

斷崖と斷崖とに挾まれて狹くなつてゐる個所から、川の水が漏斗から落ちるやうに逆つてゐる樣なども面白かつた。そこに、さうした情景に適はしいやうな形をした橋が懸つてゐて、橋の上からの眺めも捨て難いものに思はれた。

そこの滯在を終つた後に、そこから私はサンモーリズに向つたのであるが、サンモーリズまでの道中は至つて平凡な感じであつた。しかし事實は必らずしも平凡であつたわけではなく、それまでに餘りに多くの雄大な高山美に接してきたので、今ではもうちよつとした景色ぐらゐには全く心を動かされなくなつてゐたからであつた。

ローン氷河に近い山を越えて、メーリンゲンへ降りてくる街道は、如何にも高山の中の道らしい氣分がして心を惹かれた。此處は徒歩でも行けるやうな、山越えの道としては非常に樂なよい道であつた。

ユングフラウの西方に當つて、カンダステーグといふ谷間がある。其處には草原や瀧や湖水や例の丸太作りの瑞西特有の人家が、それぞれいい位置に天然の妙手によつて巧みに配合されてゐる。そのために自づと變化ある風景を作つてゐるので、畫家などが喜んで、畫を描きに來る場所になつてゐる。ホテルの設備も整つてゐた。

カンダステーグの谷から、グリーグへ通じるトンネルを出た所に、佛伊戰爭の落武者が逃げ込んで出

來たといふ部落がある。

畫を描く人なら、是非そこへ行つてみなければいけない、と宿屋の亭主がすすめるので、行つて見た。成程宿屋ですすめるだけのことはあつて、近代文明の波から置き忘れられたやうな、悠々たる村人の姿や景色は情趣に富んだものであつた。

草原には二三頭の牛が草を喰んでゐる。時々頭を擧げてモーッと吠えたりする。その傍に牛の番をしてゐる村の女の姿が見える。女は腰を下して毛絲を編んでゐる。そして牛が草を喰むことに充分滿足したらしいのを見ると、立上つて、牛を引いて、草原を横切つて歸つて行く。

實に長閑な別天地の思ひがする。

人家の前には、大木をくり拔いて水を溜めて置く水槽などが据えてある。そんなものも如何にも鄙びた點景となつてゐた。

伊太利領の美觀

アルプスも伊太利領の南面した湖水地方へ來ると、風景が大分違つてくる。

シンプロン・トンネルを出て少し行つた所に、ストレッサといふ所がある。そこに優れた湖水がある。周圍の山はやや遠いが、湖水を主にして眺めると、風景なかなか佳絶である。

湖水に三つほど島が浮んでゐる。

その島に別莊が建つてゐる。何でもその一つは嘗て獨逸のカイゼルのものであつたとかいふ話である。が、それは兎に角その別莊が、その湖水に適はしい點景を成してゐる。

純伊太利式の建物で、赤い屋根に白い壁といつた明るい建て方である。その周圍には段々になつた石垣の花壇が設けられてゐる。花壇には珍奇な植物が花を咲かせてゐるといつたやうな眺めである。

湖畔の岩山の中腹には、サンタ・カテリナ・デル・サッソといふやうな寺院が建つてゐる。

この邊へくると、山はあつても最早雪を戴いた山は見えない。

瑞西の山間で見た丸太作りの家とは全然趣も建て方も違つた人家が並んでゐるが、それ等の家々も、此處では、その湖水に適はしい明るい感じで、氣持がいい。いづれも赤い屋根で、屋根には大抵低い煙突が立つてゐる。

その庭に葡萄棚が作つてあつたり、サイプラスの木が繁つてゐたりしてゐる。私はそのサイプラスの木が氣に入つて、畫にするに形のいい木を探して歩いたりしたこともあつた。

またこの邊には、日本で見るのと同じ藤の花が開く。アーチにその藤を捲きつかせたりしてゐるやうな家も見受けた。舟を雇つて、湖水に漕ぎ出して、そこで頻りに畫を描いてゐたら、遽かに夕立がやつてきて、濡れ鼠になつたことなどもあつた。

ヒマラヤ

印度平野に連なる大平原

ヒマラヤは、恰度九州の端から北海道の端までの長さぐらゐの連山である。幅も恰度日本内地の幅に略々等しい。

だから太平洋と日本海との水を干し上げて、陸地を今よりも更に押上げ高めたものがヒマラヤ山脈だと思へば間違ひはない。

ヒマラヤの主脈の後ろ手に、もう一つトランス・ヒマラヤが附屬してゐる。

パミール、チベット、カシミールといつたやうな國々に跨つて、印度平野に面してゐる。その規模の

素晴しく宏大なことはお話のほかで、世界の屋根と稱されてゐるのも至極尤てもである。私なども行つみて、想像以上に大きなものであることに驚かされた一人である。

印度平野からヒマラヤの高山まで達するにも、驚くべき長い距離を行かなければならない。印度からヒマラヤへ差しかかつて、それから三百何哩といふ遠くまで行つて、それでもまだ僅かに四百尺程しか高くなつてゐない。

其處を過ぎて初めて小山の連なつた複雜した尾根になる。その尾根をまたかなり遥かな遠くまで行つて、やつとシルグリイといふヒマラヤの麓らしい所に辿り着く。

しかもそこから肝心の山までは更に四十五哩もあるといふやうな有樣である。

ヒマラヤの裏手はづつと高原になつてゐるので、ヒマラヤを眺めるには印度側からが最も適當でもあるし、美しいわけでもある。

チベット側のチベット高原でさへも、高さは一萬二三千尺もある。一萬二三千尺といへば殆んど富士山の高さである。

高峰地方を外れた高原でさへそのくらゐだから、高峰そのものの高さが如何に高いものであるかも推し量れやう。

だが、ヒマラヤ地方は暑さに惱まされる印度にとつては、一大避暑地として考へられてゐる。從つて幾つかの町が發達してゐる。ダージリン、ムスリー、シムラ、カシミールのスリナカといつたやうな町がその例である。

シムラは印度の夏季の政治の中心とさへなる町である。だから學校病院といふやうな設備に至る迄整つてゐる。夏期には、暑さに惱む兵隊を、交替に此町へ遊びに寄越したりする樣なことまでやつてゐる。

この町からは、勿論ヒマラヤ山脈が見えてゐる。

しかし見えてゐるだけの話で、まだまだ隨分遠い。

日本アルプス登山の考へなどを以てしては、到底想像もつかない。山脈が見えるからもう占めたもの

だ、なんて考へはヒマラヤでは通用しない。

嘗てダージリンまでの鐵道を通じる際には、實に並々ならぬ困難を排して遂行したものだといふ。といふのは途中一面の熱帶の叢林だからである。現今もなほその一條の鐵道線路を除いて爾餘の地は盡く人跡未踏のジャングルである。象と虎と毒蛇の棲むジャングルである。下草深く生ひ繁つた原始の儘の熱帶の大密林である。鐵道開通の如何に困難であつたかは、恐らく想像に餘りあるものであつたらう。

ただヒマラヤへ達する目的だけのために通じられた鐵道である。他の何處へ支線を分つてゐるといふのでもない。

ヒマラヤの眺望を味はふには登山鐵道が簡便である。自働車で行つてもよい。自働車の賃金も存外安い。二人以上で行くならば、登山鐵道の一二等車に依るよりは寧ろ安くつく。鐵道は狹軌道の至つて粗末なものである。

順路はダージリンからである。他の地點から行くといふやうなわけには行かない。

印度平野から遙かに眺めたヒマラヤの雄姿の感じは、他の國では經驗することの全く不可能なものである。

第一他の國には、高山を前にした平地といふやうなものがない。瑞西には殆んど平地といふものがないから、アルプスでは無論經驗できない。ロッキイには高原はあるが、平地とはいはれない。從つて印度平野からヒマラヤを遠望するやうな感じの場所はない。日本アルプスならば松本平から眺めるといふわけであるが、遠望とはいつても印度平野からの遠望とはまるで程度が違ふ。それに山の規模が違ふから比較のしやうがない。印度平野からの眺めに較べれば、松本平から日本アルプスを望むのなどは、遠望の數にも入らない。

夜明けだとヒマラヤが朝日に照り映える。夕方なら夕陽に染め出される。その光線の具合がいひやうもなく見事なのである。

鋸狀のギザギザの連山である。それが盡く雪を冠つてゐるのである。

しかもそれは汽車が幾つ驛を過ぎて行つても、依然として同じ姿なのである。近くも遠くもなつた氣がしない。

山が背後へ向つて、順々に高くなつてゐるので、山の上へ山が疊み重なつてゐるやうに見えてゐて、他の國で連山を眺めるのとは大分容子が違ふ。

それに空氣が鮮明だから遙か後方の山までもはつきり見える。

同時に、空氣の鮮明なために、山が近く見える。しかし事實は非常な遠距離にある山なのだから、幾ら汽車が進んで行つても、一向山が近くなつたやうな氣がしない。

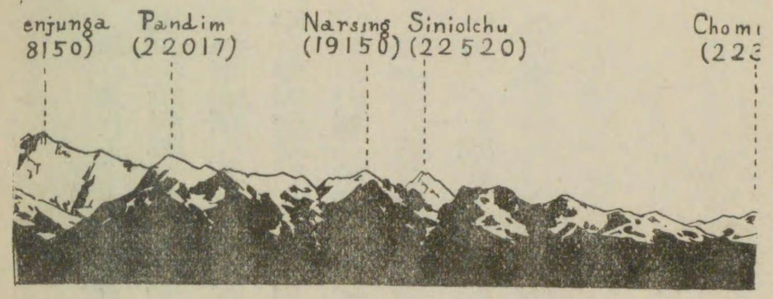
カルカッタを夜汽車で出發すると、夜明けと共にヒマラヤ連峰が見えてくる。かねて、汽車の進路のやや右手に、カンチェンジャンガの頭が僅かばかり、朝日の光を映して見えてくるといふことを聞かされてゐたので、私は夜の明ける前から眼を醒まして待ち構へてゐた。それほどの情熟を、まだ見ぬヒマラヤに對して私は抱いてゐたのである。

麓のシルグリーから自動車乘るとジャングルの間を通過し、高山帶の森林へ差しかかり、濶葉樹の森林から針葉樹の森林へと這入つて行く。

麓の町ダージリン

登山鐵道の通じてゐる沿線のうちで、一番高い位地に當つてゐるのはグムといふ町である。印度の熟氣も最早此處まで來れば衰へざるを得ない。それはグムに成長してゐる植物の種類を見ても一目瞭然である。日本で見るやうな梅や海棠のやうな溫帶植物が目につくのである。

グムから今きた道を振返れば、果しもなく茫漠として印度の平原が擴つてゐる。ベンガル灣へ注ぎ込むインダス河が、白く帶のやうに平野の上に曳かれてゐるのも微見える。ヒマラヤのすぐ麓まで、僅かの傾斜さへ示してゐない眞平らな平野である。

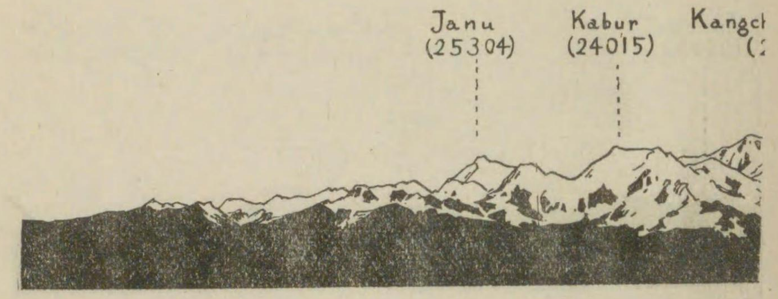


グムからやや降りになつて、そして間もなく達するのがダージリンである。グムより低いといつても、ダージリンは最早七千尺の高さを持つてゐる。

ダージリンはヒマラヤの代表的都市である。此處でもグム同樣温帶に屬する植物が眼に觸れる。日本で見ると同じ杉の類の並木なども植はつてゐる。

私はダージリンでマウント・エベレスト・ホテルに泊つた。私の部屋は恰度ヒマラヤ山脈と眞向ひになつてゐて、窓を開けば、長く續いた鋸狀のギザギザ尖つた山脈が眼の前にある。カンチヤンジユンガを指摘することも容易であつた。

私は高山の曙を愛するために、毎朝太陽の昇つてくるのを見やうとして、六時には寢床を離れた。



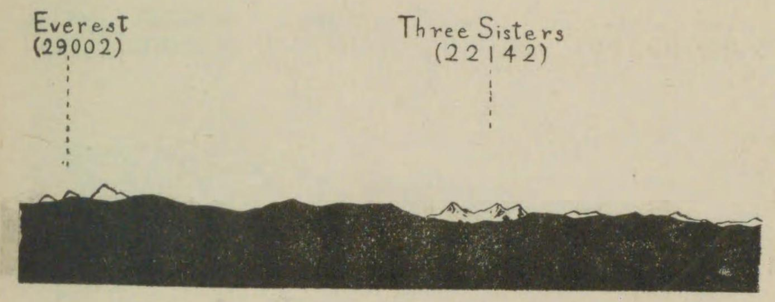
六時といへば遲いやうだが、時は十二月のことで、太陽の昇るのが最も遲い季節であつたから、その時刻からでないと、夜は明けかからないのであつた。

夏季なら日本アルプスでも四時には起きて居たが、ヒマラヤでもその季節なら、勿論もつとに早く起たきだらう。

雨は殆んど降らなかつた。毎日大抵晴天續きであつた。

雲も日本の山のやうに多くない。朝は殆んど一點の雲もなく晴れてゐる。午後になつて雲が出てくるやうなことがあつても、夕方にはまたカラリと晴れ渡る。

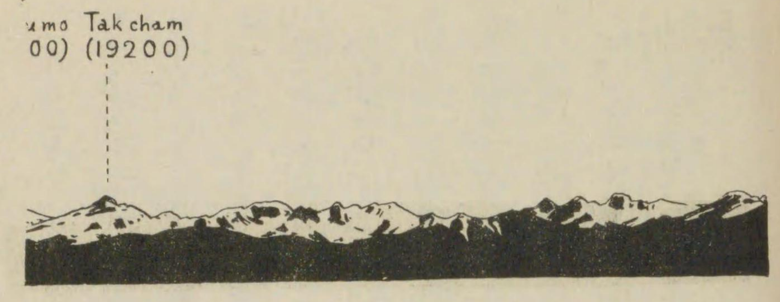
前にも述べたやうに空氣が鮮明なために、事實は四十五哩の遠い彼方に



あるカンチヤンジュンガが、實際よりも遙かに近く見える。鋸狀に峰のギザギザ出たりひつ込んだりしてゐる山脈全體が、極めて間近に見えることも勿論である。

これも前に述べたことであるが、事實はその山脈は背後へ向つて順々に高い山が疊み重なつてゐるのだが、うつかり見てゐると、遠い山も近い山も殆んど同距離にあるかとさへ思はれるくらゐで、山脈の厚みに就いては、殆んどそれがよく分らない。

謂つてみれば、それだけ山脈の近くに來て見ても、それでもなほ視覺に映じる感じには、印度平原からやつて來る時に眺めた感じとひどく似たものがある。遠いやうで近く、實在の距離の觀念がはつきり摑めない、といつた風の感じである。



ホテルの窓を開けば、ヒマラヤの雄姿が一望のもとに收められるとはいふものの、しかしダージリンから直ちに山脈に向つて高まつて行つてゐるわけではない。

山脈はダージリンから谷を隔てて聳えてゐるのである。もしも眞直ぐダージリンから正面へ一直線に、山脈に向つて行くとすれば、先づ最初に低く谷を降りなければならない。降りた谷をまた登つて、そしてまた降りて、また登るといつた具合に、更に幾つもの谷が、山脈とダージリンとの間に落ちこんでゐるのである。

カンチェンジヤンガを始め、その他多くの高峰の高さが、ダージリンの石に刻み記してあつた。それを控へてきたから、左に列記して、ヒマラヤ連峰の如何に高いものであるかを想像して頂くことにしやう。

オブゼベートリー・ヒル（七千百六十八尺）
カングラ（一萬八千三百尺）
ジヤヌー（二萬五千三百〇四尺）
カブール（二萬四千二百尺）
カンチエンジヤンガ（二萬八千百五十尺）
パンデイム（二萬二千〇十尺）
ナルシン（一萬九千百三十尺）
シニヨルチユウ（二萬二千五百二十尺）
チヨミウモ（二萬二千三百尺）
タクチヤム（一萬九千二百尺）

以上の諸高峰はいづれもダージリンからはつきり望み得るものばかりで、更に位置の關係上よく見えない高峰を數へれば非常な數に上るのである。

第一、二萬九千二百尺の世界最高峰のエベレスト山が、左寄りの山に隱れて望み見ることが出來ないといつたやうなわけである。後方のトランス・ヒマラヤにも世界第二の高峰ゴドウイン・オーステンの如きが聳えてゐるが、勿論それも見えない。その他ムスタフタワー、ブロードビー、バルトロ等七千二百メートル以上の高峰の數は、およそ五十に及んでゐる。

雪は略々一萬七千尺の高さ邊りから積つてゐるらしい。

前に記した高峰の中で、シニヨルチユウといふ山は、世界第一の美峰の稱がある。雪の懸り具合が素晴しく見事なのである。斷崖の岸石は全く雪に蔽はれてゐて、露出した個所は少ない。その雪の上にはまた上から雪の滑り落ちた皺が現はれてゐて、縞模樣のやうな線狀を描いてゐる。まことに世界第一の美峰たるの名を恥かしめない見事な山であつた。

ヒマラヤとは「雪の庫」といふ意味ださうである。熱帶印度を前に、かういふ大高山があるのだか

ら、實際印度からいへば「雪の庫」の觀があるだらう。

言葉の意味を擧げた序でにもう一つ記せば、ダージリンは「金剛寶土」の意ださうである。

ここでもう一度ダージリンに話を戻すと、これは尾根の上に立つてゐる町なので、從つて土地の起伏が極めて多い。

ダージリンのもう一つの特徴は人種の多いことである。周圍の、チベット、シッキム、ブータン、ネパール、カシミールといつたやうな、高原地方の人間が多勢入りこんでゐる。見るからに頑健さうなチベット人、胸幅の著しく廣いシッキム人、さうした人間を見てゐると、彼等が如何にも嶮峻な高原地方に生れた人種であることが頷かれる。シッキム人の胸幅の廣いのは、元來彼等は空氣の稀薄な高山帶に住んでゐるので、自づから充分に息の吸へるやうに、さうした胸幅を天然に授けられてゐるのであらう。

かうした人種以外に、印度人はいふまでもなく、印度平原からやつて來た種々雜多な人種が集つてゐる。白人のゐるのも無論のことである。

だから市場に行つて見ると餘程面白い。かうした種々雜多な人種が、それぞれ素質を異にした體格、容貌、服裝を以て群つてゐるのだから、その複雜さといつたらない。私はその市場の變つた容子を、畫題にしてみやうかなどと思つたこともある程である。

カンチエンジヤンガの曙

タイガー・ヒルはダージリンから一千尺高くなる。そしてカンチエンジヤンガの美觀を喫しやうとする人は、是非ともこのタイガー・ヒルへ出かけるのである。

それも夜明けの昇天の際のカンチエンジヤンガを見るためなので、普通の客は夜中の三時頃にダージリンを出發する。乘物は馬か駕籠で、自働車は通れない。

駕籠は苦力が曳張つて行く。一種の日本の人力車のやうなもので、一臺に苦力が五人ぐらゐつき從

ふ。なにしろ眞暗な山道を行くのだから、無氣味である。その弱味につけこんで、屢々苦力が客に酒代を強請して威嚇するといふやうな話も聞かされる。苦力には多く附近の高原帶の人種がなつてゐるやうであるが、私の駕籠を曳張つて行つた苦力の中には、支那人も一人混つてゐた。

夜中に出かけるのは、その日歸りの客である。私は畫を描くのが目的であるから、午後から出かけた。

道は最初ダージリンの尾根傳ひに進む。それから次第に嶮しい淋しい山道になつてきて、森林帶へ這入る。

高山ではあつても、樹木は熱帶の氣を帶びてゐて、日本のとは大分趣が違ふ。オリーブ色の猿おがせに似たものが一面に密林の間に懸つてゐる。風が吹くとそれが吹き麾いて、氣持は餘りよくない。森林の地上は一面のジャングルで、下草が深く生ひ繁つてゐる。とても人の踏込める場所ではない。

森林の間から、稀に見晴らしのいい所へも出る。

森林を拔けると草原帶になる。

タイガー・ヒルにはバンガローが二棟立つてゐる。日歸りでないとすれば、そこへ泊るのである。そして其處へ泊らうとするものは豫めダージリンでその許可證のやうなものを貰つて行く。それをバンガローの番人に見せて、泊めて貰ふのである。

しかし食糧や炊事道具や寢具類は、ダージリンから持つて行かなければならない。そのために料理人もホテルから連れて行く必要がある。

吾々の伴つたボーイは白い馬に跨つて、私の駕籠について行つた。

荷物は荷物だけ運ぶための、違ふ道から送られていつた。

タイガー・ヒルはなかなか寒い。熱帶性の高山植物などが生えてゐる。

バンガローの泊り具合は思つたよりもよかつた。

未明、バンガローを出ると、足を踏む度にザクザク音がする。はじめは何の音だか分らなかつたが、

手でそッと撫でゝみると、一面の霜柱であつた。其處は高さこそ約八千尺程もあるが、兎も角熱帶印度の直ぐ傍なのだから、まさか霜柱が立つてゐやうとは豫期しなかつた。が、時には雪の降ることもあるさうである。

バンガローから二三町行くと、タイガー・ヒルの頂上である。そこに物見臺がある。そして既にもう幾人か夜明けのカンチエンジヤンガを見るための客が來て待つてゐる。朝の冷氣にみんなガタガタ顫へてゐる。

タイガー・ヒルに立つと、恰度太陽の昇つて來やうといふ東の方は、ヒマラヤ山脈の低い部分になつてゐる。其處から見える東方の山々には、乾燥期には殆んど雪がない。

そして山が次第に低くなつてゐるから、遠く遙かな無限の彼方の水平線上から太陽がせり出してくるのが見える。

太陽の昇つてくると反對の側は、峻烈な高山の連なりである。そして直ぐそこにカンチエンジヤンガの高峰が峻えてゐるのであつた。

カンチエンジヤンガの左方遙かに遠く小さく、エベレストが見えてゐる。

遂に太陽は昇りかけた。

その光の流れが先づ最初にエベレストに投げられる。鮮明限りない紅い色である。畫家の方でいふと、ピンク・マダーといふ色である。

と思ふうちに、その紅は忽ち擴つて行つて、カンチエンジヤンガを蔽ふた雪の總てが染め出される。眞赤な雪となる。それが直ぐオレンヂ色に變る。オレンヂが褪せて、黃色に移る。黃色が全く拔けてしまふと、皚々として眞白い本當の雪の色となつて、我々の前に靜止してゐる。

雪が最初紅く染め出される時、カンチエンジヤンガの雪の間の森や露出した岩石は、天鵝絨のやうな紫色を帶びる。そして雪の色が變化して行くと同時に、その紫から次第に紅味が拔けて行つて、遂に雪が眞白なその本當の姿に返ると共に、森も岩もまたそれ自身の色になつて現はれる。

だが、雪が全く自然の白色になるまでは、太陽はまだ水平線下にあるのである。その姿は見せずに光の流れだけを投げるのである。だから當然我々の足もとはまだ暗い。空は青づんだ鼠色である。

ただ眼の前の高山だけが、水平線下から放つ太陽の光を反映してゐるのである。

カンチエンジヤンガの雪が全く白色となつた時、初めて太陽は遠い水平線上に現はれる。そして晝がくるのである。

エベレストの頂きがポツチリ紅い斑點のやうになつて、その色がカンチエンジヤンガに擴つて、すつかり白い雪の色になるまでには、およそ十分間もかゝるやうな氣がする。

晝の光がくると、ダージリンの町の家が、針で突いたやうに小さく點々として現はれる。同じく町の斜面に段々になつて擴つてゐる茶畑や杉の並木を指摘することもできる。そして其處から遙かに、尾根や森林を縫ふて、苦力に駕籠を曳かせて登つて來た道筋も眺められる。

山々に積つた雪には、自づと日向日蔭ができる。ある距離を置いて眺めるために、その雪の白い色彩が繪の具では出せないやうない〻感じである。それは空氣の鮮明なためもあるらしい。日蔭は落着いたコバルト色を帶びて、日向とくつきりと色の對照を作つてゐる。

カンチエンジヤンガの前方の蔭ばみになつた小山の裾のコバルト色。柔いあの色も私には忘れられない。

よく帶のやうな細長い横雲が、連山の恰度雪線のやや下方に棚曳く。さういふ雲が出るのは晴天の證據である。

綿をちぎつたやうな雲が山の上に湧き上ることもある。時には雲が擴つて、山々盡くを蔽ひ隱してしまふやうなこともある。

が、殆んど大抵天氣續きであるから、多くは今いつた帶のやうな横雲が懸るだけである。どうかすると午後の一時二時頃に、一時的にその雲が大きくなつたりすることもある。

さうした雲も、夕方が近づくに從つて、次第に少なくなつて行つて、遂には全く消え失せてしまふ。

その點晴天の日の雲の變化は日本アルプスなどとも似てゐる。

雲が次第に晴れて行く時の樣にも、非常な興味を感じる場合がある。雲の切目から、今までその雲に隱されてゐた山の雪の肌が露はれてくる瞬間などには、それこそ高山美の魅力が心に浸み通るやうである。

やがて雲が黃ばんだ輝きを帶びてくる。それは日沒の光に反映するからである。ヒマラヤの夕陽である。

日は再び遠く遙かな水平線に歸つて行く。

再びカンチエンジヤンガの雪の色が變化する。今度は朝日の時の變化の順序の逆に、白い色が黃色を帶び、それがオレンヂに變つて、紅に移る。

雪も雲も夕陽の光に燃え輝く。

そして遠い西の水平線の色。そこに日が落ちるのである。

印度に起つた佛敎の信徒は、西方淨土といふ言葉を口にする。さう――あの日沒の遠い水平線を見れば、我々にしてもまた赤金に輝き渡る西方淨土が彼方にあるといふ、一つの美的幻想に捉はれもしやうではないか。

夕陽の色は刻々に强烈になる。やがて一段と强く赤々と燃え輝くかと見れば、それは日沒の最後の瞬間である。

陽は遂に沒する。と、雲と山とを染め出してゐた强い色は、寧ろ唐突なくらゐプスリと消えてしまふ。

かくしてヒマラヤの夜はくる。

美しく晴れ渡つた夜の星空。

熱帶に近い高山の上だから、星は大きく明るく光り輝く。赤熟してゐるかと思はれるやうな星。青く澄み切つたやうな光を放つ星。――

星明りに、山々の雪は嚴然として亡靈のやうに白い。その青白さは、ヒマラヤの夜の山々の眠りの色ではなからうか。

高山の美を語る（終）

不許複製

昭和六年六月十八日印刷
昭和六年六月廿四日發行

高山の美を語る（奥付）
定價壹圓貳拾錢

著者　吉田博
發行者　東京市京橋區銀座西一丁目三番地　增田義一
印刷者　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地　瀧澤一郎
發行所　東京市京橋區銀座西一丁目三番地　實業之日本社　電話京橋五一二一—五一二七　振替東京參貳六番

（株式會社秀英舍印刷）

旅行禮讃

十一版　定價貳圓　送料拾貳錢

鐵道省囑託
谷口梨花氏著

足跡天下に普き著者が、旅の愛好者に捧げた旅の絶好の好伴侶

著者の足跡天下に普きは今更説くに及ぶまい。その著者が旅心の動くがまゝに、北は北海道の果より南は薩南の揖宿温泉まで、全國の名勝、古蹟、神社、佛閣、温泉を巡遊した趣味深き印象的旅行案内記である。記するところ交通路、所要時間、費用、旅館等を極めて正確に記述したれば、最も信用すべき旅行案内記とも云へよう。

内容略目

旅の興趣…梅薫る里…花の旅…青葉の旅…海へ川へ…夏の一日…富士の裾野…避暑顧問…伊豆の話…安房の話…温泉漫談…伊香保の話…箱根の話…温泉巡禮…忘れられぬ宿…奥羽ところ〴〵…日光の話…平泉の話…月の名所…十和田湖の印象…北海道の水郷…飛彈風物記…南薩の旅…その他數十項目

水彩畫の描き方

十三版　定價貳圓　送料八錢

丸山晩霞畫伯著

斯道の大家が初心者の爲祕訣を公開した書

水彩畫をキレイに描きたい方に特に薦む!!!

著者晩霞先生は水彩畫界の泰斗である。多年の研究と經驗とを此一卷に公開し、更に、其上、用意周到な説明圖を挿入して懇篤至極な説明を與へてゐる。水彩畫を學ばうとする諸君は勿論、現に練習しつゝある諸君にとつて絶好無二の良書である。

目次要項

繪畫の意義…素描の練習…用具…寫生の心得…直線と曲線との調和…線の練習
自然と線…遠近法…靜物寫生…構圖の取り方…鉛筆畫の練習…室内夜間の寫生
…木炭畫の描法…色彩の調和…着彩の仕方…靜物寫生…野外寫生の時間…草花の描き方…風景畫…平地と樹木との描き方…高原及び溪谷の描き方…山嶽と雲の描き方…河及び河原の描き方…海の描き方…風景畫の線を使ふに就いて…其他

旅と歌と

竹柏園主
佐々木信綱博士著

五版　定價壹圓八拾錢　送料八錢　中型函入

歌壇の重鎮竹柏園主が旅と歌とについて、古人の精神生活のあとを慕ひ、藝術の仙境をさまよひ、且また、著者自ら、折にふれ時につけての旅歌のくさくさ、情感のかずかずを書きつづりたるものは本書にして、近來得難き好著である。

目次概要

萬葉人の旅——西行と旅の歌——歌と名所——西の京東の京——海と山と——澡浴雜詠——ここかしら——南支風景談——犬山城の夕ぐれ——瀬戸に遊びて——大原の秋——旅のすさび——豪土吟——湖畔の一夜——ひめ山ものがたり——その他、挿畫九葉入

和歌を志す婦人の爲に

佐々木博士著

十二版　定價貳圓　送料八錢

俳句の作りやう

高濱虛子氏著

八十版　定價八拾錢　送料四錢

俳句とはどんなものか

高濱虛子氏著

六十二版　定價八拾錢　送料四錢

再生の歐米を觀る

煙山專太郎氏著
早大教授

三版　定價貳圓　送料拾錢　函入美本

單なる歐米見聞記や印象記は、舊い表現ではあるが、汗牛充棟もたゞならぬほどあるが、勝れたる史學家が嚴正なる史學の立場から、再生の歐米新興の歐米を觀察し批判したるものは本書が最初である。

世界の大勢、歐米の未來を論ぜんとするものは、先づ本書を繙け。透徹せる觀察と鋭利なる史眼とは、運筆の中に生さ〳〵と躍動してゐる。

内容略目

△日本から支那へ……△印度支那瞥見……△印度洋上……△エヂプトの一週日……△アテネでの生活……△サロニカ瞥見……△エーゲ海からマルモラ海に……△コンスタンチノープル生活……△君府から、アンゴラへ……△アンゴラ見物……△アンゴラからスミルナへ……△スミルナ見物……△再度の君府生活……△トルコ拾遺……△ロマニア見物……△ソフイアベルグラード……△ブタペスト……△ライン……△プラーグ……その他數十項目あり

醫學の裏面的研究

醫學博士　高田義一郎氏著

三版　壹圓五拾錢　送料八錢

巴里の横顔

廿五版

壹圓五拾錢
送料六錢
寫眞多數挿入

大藝術家の故國に殘せるパリ土産

藤田嗣治畫伯著

巴里！　何といふ魅惑的な響なることよ。それは光と影と、色と香の渦巻く美の交響樂、夢と現の都である。

近代生活を語り近代流行を說くほどの者は、先づ巴里の實相を知らねばならぬ。巴里生活十七ケ年、巴里の明暗表裏を妖星の如く色どるツゲヂ・フヂタの『巴里の横顔』は、いま、諸君に何を物語らんとするか。

―内―容―略―目―

パリーの年中行事――パリの流行――パリの百貨店――キヤツフエ――踊り揚――立食――パリの日本人――パリの見世物――パリの寺院――パリの公園――パリの女――パリの女優――マネキンダンサー――モデル――アミ――同性愛――共和祭――クリスマスとお正月――カルナヴアル――蚤の市――曲馬團――市場――乞食――海水浴――巡査――セーヌ海岸――物賣り――氷屋――犬の床屋――パン屋――質屋――墓――僕の旅行――キヤツフエと踊り場――同性愛――その他數十項

素顔のハリウッド

六版

定價壹圓五拾錢
送料八錢函入

上山草人著

谷崎潤一郎氏曰く　この間、十一年ぶりで大阪へ來た草人が、私の家に客となつて、漫談の豫習をするといつて家族一同を爐邊に坐らせ、チビリ〳〵熱燗の酒を酌みながら『ではもう一席』『ではもう一席』とハリウッドの土産話を縷々としてしやべり出したが、その口を衝いて出る警句、諧謔、諷刺、滑稽に、女子供まで割れ返るやうなはしやぎ方で、夜の明けるのも知らなかつた。

その時私は、こんな面白い話を自分だけ聞くのが惜しい氣がしたが、今その漫談が一層の彫琢を加へ材料を豐富にして出版されるのは甚だ喜ばしい。

―内―容―略―目―

ハリウッド――ハリウッドのアウトライン――酒風呂の痴人――娯樂――ワイルド・パーテー――流行――贅澤屋――食べ物――映畫戯堂の繁榮――映畫の特殊興行――ブレビユー――ミツドナイトショウ――オープニング・ナイト人氣俳優――映畫俳優――スタアの私生活――動物スタア――撮影小話――映畫面上のキツス――撮影中の風紀問題――**映畫と私**――ジョンバリモア――ポー其他數十項あり

鈴木傳明氏著　映畫王チヤツプリンと旅行記

その小傳

四版

壹圓貳拾錢
送料六錢

茶前茶後

現代名士奇聞錄

七版　定價壹圓　送料四錢　四六判

奎城

增田義一氏著

本書は、主として現代名士の性行につき興味ある逸話を集錄したるもの。收むるところ政治家あり、實業家あり、教育家あり、醫師あり、文士あり、軍人あり。藝術家あり、その美談、珍談、皮肉、滑稽を遠慮なく素破ぬけるものにして、一讀無限の興味を覺え、卷を掩ふの暇なからしむ。寸暇だにあらばこれを繙き、天成のユーモアに接すると共に天下の名士の横顔と素顔の妻描を見るべし。

目略容内

◎顏から火の出た時計會社長◎鰻攻めに會つた男爵◎友人に處女演說の評點を賴む◎同姓同名の滑稽◎變相將軍の勝利◎西洋人と間ちがへられた話◎美辭麗句亂用の名演說◎愛孫の警句に參つた子爵◎戰勝を神に祈る將軍◎隣家に同名異人大迷惑◎博士大明神の話◎主人公なしの洋行送別會◎人違珍談◎居眠つて明說拜聽◎三味線携帶の洋行◎獨逸で日本人の犬發見に驚く◎公爵の諧謔◎訥辯の雄辯◎その他名士逸話奇談數百項を將む。

ベースボール

攻擊篇

七版　壹圓五拾錢　送料八錢

前早大野球部監督

飛田穗洲氏著

著者は早稻田大學の名選手たりし頃より、同野球部監督として令名嘖々として、その職務を全ふするまで、前後廿年に涉る豐富なる經驗と知識とを基として、ベースボールの眞髓を說き、その攻擊法を述べたもの。

目略容内

一　打擊の心得……バットの選定以下二十四項。二　バンド……バンドの姿勢以下九項。三　打者の心得……十項。四　一般走壘……スパイク靴以下二十四項。五　盜壘……十四項。六　滑りこみ……五項。六　コーチヤその他數十項にわたり懇說す。

飛田穗洲氏著　**ベースボール　內野篇**　壹圓八拾錢　送料拾錢

飛田穗洲氏著　**ベースボール　外野及傳習篇**　壹圓五拾錢　送料八錢

福田雅之助氏著　**ローンテニス**　四版　定價貳圓　送料拾四錢

モダン用語辭典

廿五版

壹圓參拾錢

送料六錢函入

早大教授
喜多壯一郎氏監修

1931年のモダン生活の案内書

例へばモダンなお友達とお茶を飲む時でも、一枚の新聞を手にした時でも、これさ あれば凡てのモダン語が立ち所に解る。新しい言葉を知ることは、時代精神を知ることである。モダン語を解せずして新時代を知ることは出來ない。本書はその意味に於て編輯された。

下の言葉御存じ

尖端的最新用語實三千有餘

エロ……アヴェック……アバンガルト
ス……アジ、プロ……アウフヘーベン
ツ……アパッシュ……アド・マネキン
ト……インテリ……感覺的戀愛
解……ウルトラ……ネッキング
カ……キヤバレ……ヴアラエテ
ジ……ギヤツグ……シユール・レアリズム
ノ……白板自摸……友愛結婚
方……ナル……プロムナード
階……ダナ……モンタージユ
級……ツと……
……プラ……
……傳……
……單……
……幹……
……シ……
……ー……
……ク……
……考規學……

三S三口時代の必備實典……本書内容小部分

西式强健術と觸手療法

百九十版

定價壹圓

送料六錢

東京市技師
西勝造氏著

世界醫學界生理學界及び强健術界の一大驚異

現代十八名士實驗談掲載

朝夕十分間づつの運動で無、息災の體となり、しかも三ヶ年にして蚤も蚊も食はぬ不死身となる健康法。又本書を一讀し四十分間の合掌行を實行すれば、觸手忽ち難病が快癒する奇蹟的靈能を體得し得。

著者は實に數ヶ國の外國語をあざやかにあやつり、東西古今の健康法三百六十餘種を理論的に研究し實行すること三十年、今、進化論と最新科學に基礎せる獨特の健康法を發表す。稱讃の聲全土を震憾す

目略容内

準備運動——完全に正しき背柱の持主には病なし——一日の疲勞回復に特效ある運動法——胃腸の消化作用——血液循環に關する新說——生水を飲む者には病なし——心の持ちやうで健康を支配す——難病治療の合掌四十分行——酵素の偉力——合掌の治療の效果——その他觸手篇には何人にも實行容易なる各種疾病治療法を說く

九條武子夫人著

普及版

無憂華

三百四十版

定價壹圓
送料八錢
寫眞八枚挿入

附錄

九條夫人ブロマイド寫眞入

體驗裝幀
挿繪其他
變り無し
優雅高尚

本書一度出版せられるや、世は無憂華時代を現出し、各婦人雜誌は競ふて無憂華銘仙、無憂華錦紗、無憂華秩父を代理販賣し、又無憂華髷を考案發表し愈〻本書の人氣を煽つてゐる。本書は又女學校用教科書に採錄されて好評を博し、外國語に譯されてサロンに語らる。詩歌は多數作曲されてステージに歌はれ、戲曲は劇場に上演せられて人氣愈〻騰る。特に本書の印税が基礎となり、そが慈善病院が建設せられ、九條夫人の聖なる心は、現代の我々の心に流れ、そこに力强き鼓動を聞く。

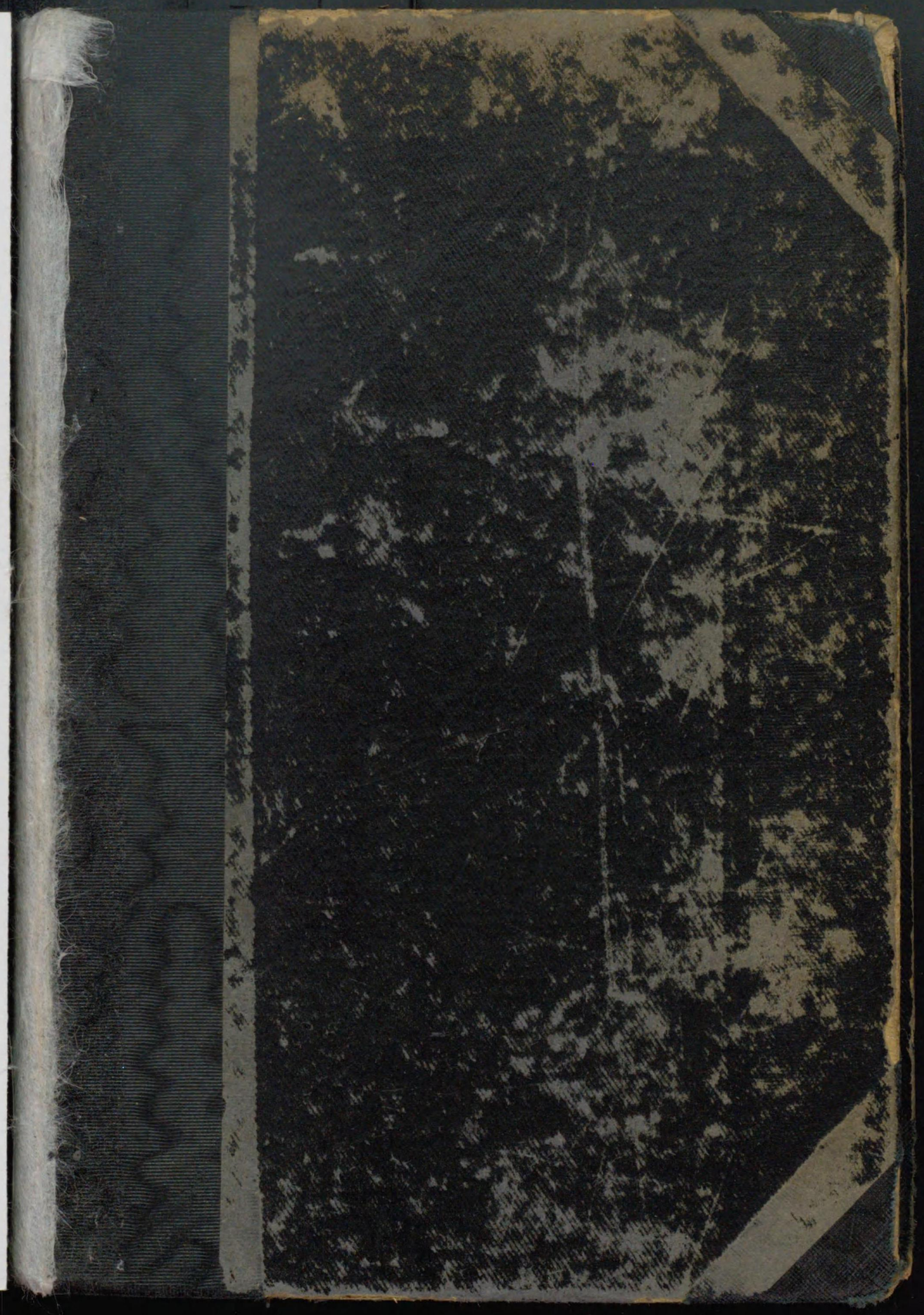
無憂華

定價貳圓
送料拾錢

59
34

實業之日本社發行

595
341



Kodak Gray Scale

C Y M

© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

inches 1 2 3 4 5 6 7 8

cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black